

本科1期5月度

解答

Z会東大進学教室

慶大小論文



【添削課題】

出典：静岡大学・人文（法）・後期・03年

解答

問1

国民の知的水準の向上と豊かな社会生活の実現という明治以来の日本の公教育の目的は、七〇年代半ば頃に実現し、日本は豊かな都市型社会を完成させるとともに、貧困の問題をほぼ解消した。しかしそれ以降も、抽象的な知識体系である「リベラルアーツ」的な一般教養を、すべての国民に一律平等に習得させることを理念とする「近代型学校」教育の大衆化と長期化が進められてきた。そのため、豊かな文明生活を自明として生まれ育ってきた子どもたちは、学校に通つて勉強することの意義を身体と情緒のレベルで明確に感じられなくなってしまった。このように、学校教育が社会的変化に対応できていないことが、学校教育が抱える諸問題の原因なのである。

問2

【文章例①】

筆者は、日本の学校教育が抱える問題を解決するためには、学校教育のスタイルと内容の根本的な改革が必要だと提案している。しかし、こうした対応策では問題の解決は困難だ。

現代の日本の社会は、豊かさを達成した反面、物質主義的な快楽主義の傾向を著しく強めている。たとえば、都市部の歓楽街・繁華街を中心として、青少年の好奇心や欲望を刺激するような多種多様の遊興施設が氾濫している。また、インターネットの普及によって、以前であれば少年たちが容易に触ることのできなかつた反社会的・犯罪的な情報にも、日常的にアクセスできるようになった。つまり、現代の日本の青少年たちは、日々無限の刺激的な誘惑や反社会的な情報に取り囲まれて生活しているのである。

中学・高校時代は非常に多感な時期であり、良くも悪くも周囲の環境の影響を大きく受けやすい時期である。仮に学校教育を完璧に理想的な環境に仕上げることができたとしても、子どもたちは学校の中だけで暮らしているわけではない。子どもたちは、社会の中で生活し、生きているのである。筆者のように、学校教育だけを改善して事足りりとするのは、こうした現代の子どもたちの状況を十分に認識していない観念論に過ぎない。

現代の学校教育をめぐる問題を真に解決するためには、学校を含めた社会全体の環境を青少年の健全な育成にふさわしいものへと改革していくことが必要なのである。

【文章例②】

思春期以降の高年齢に達した生徒たちに、画一的に「一般教養」を学ばせてもものはや意味がない。それゆえ、生徒個々人の能力と適性に応じた多様な教育を行っていくことが必要だ、というのが筆者の提案である。

私も、この筆者の見解に賛成である。確かに、貧しい社会においては、誰しもより一層の豊かさや安定した生活を求める。また、貧しい社会で生活を向上させるためには、勤勉に仕事に励むこと以外の選択肢はほとんど存在しない。それゆえ、日本の社会が貧しい時代には、一律に勤勉に教養を身につけさせる禁欲的教育も実際に有益であった。

しかし、すでに豊かさを達成した社会においては、子どもたちばかりではなく大人も含めてすべての人間が、各人さまざまの目標や理想を持つて生きるようになる。そのような個々人の多様な志向性を画一的な教育課程によって抑圧してしまうならば、青少年たちの自発的な意欲や向上心が育つ機会を奪ってしまいかねない。たとえば、数学が好きな生徒には、思う存分数学に専念できるような学習環境を与え、サッカーが得意な生徒にはサッカーの練習に取り組むことで一定の卒業単位を与えるなど、諸外国がすでに実行していることから順次導入するだけでも、喜んで学校に通う生徒たちの数は確実に増えるはずだ。

これらの学校は、生徒を抑圧して型にはめる場であってはならない。生徒の可能性を発見し、伸ばしていくための場へと変革されるべきなのである。

1 設問要求

資料を読んで以下の問いに答える。

問1

- ① 学校教育が抱えているさまざまな問題の原因が何であると筆者が考えているのかを説明する。
字数は三〇〇字以内。

問2

- ① 学校教育の問題について筆者が提案している解決策を説明する。
その筆者の提案について、自分の考えを論ずる。
③ 字数は六〇〇字以内。

2**課題文の読解****(1) さまざまな「学校制度」の揺らぎ**

- ① 今日の「学校制度」はさまざまなかたちで揺らぎを見せている。

- (1) 最近では、学校崩壊・不登校の増大・学力低下といった現象として表出
(2) ただし「学校の揺らぎ」現象は今に始まつたものではない➡三十年近い歴史

- (3) 個別に教育界内部の問題として把握したのでは解決・処理できない

- (4) 広く文明社会全体の問題が背景に横たわっている

- ② 一九八〇年代初頭には、中等教育の現場を中心に、近代公教育のはころびを象徴するような現象が続発。

- ➡「校内暴力の頻発」・「細かすぎる校則」問題・「教師の体罰」問題・「いじめ」問題・「教師の疲弊・失調」問題など
教育行政責任者・組合運動組織・教育学専攻の専門知識人・教育評論家などの多く

↓それぞれの個別問題を個別問題としてのみ組上に載せて、その場限りの、現場の切実さを踏まえない観念的な「対策」らしいものや、見当違いの総括に終始

(2) 近代化の完成と学校における「問題現象」の進行

③ さまざまな学校教育の失調現象は、共通の原因をもつた一つの現象に他ならない。

④ 【原因】 (1) 日本社会の近代化の完成

(2) それに伴う国民的目的の喪失

⑤ 明治初年代以来の日本の公教育の目的「歐米のような豊かな近代産業国家の構築」

↓七〇年代中頃に達成。高度経済成長→経済大国へ。豊かな都市型社会の完成。



この時期までは「学校成功物語」=学校教育を通してより豊かな生活・より高い社会的地位を獲得するが実質的な意味を持つものとして感じられていた時代

⑥ この時期以降八〇年代バブルへの時期に、学校における一連の「問題現象」が進行。



【原因】 豊かな文明生活を自明のものとして生まれ育つてきた子どもたち

↓どうしてわざわざ苦労して学校というところに通つて勉強するのかという目的意識が、身体・情緒レベルで実感できなくなつたことが原因



【背景】 大人たちが「生きる目的」の具体的美感を潜在的などころで喪失

⑦ 現代↓大人们が、子どもたちに、学校に強制的に通わせることの意味について明確に答えることのできにくいつき。

(3) 学校の大衆化と学校に通うことの意味の不明確化

(8) 「学校に通うことの普遍的な意義」への疑問⇒教育が大衆化するほどあからさまになる。

【理由】 (1) 教育の大衆化⇒知的能力の点で高度な学習内容についていけない子どもたちの実態が顕在化

(2) 思春期から青春期にさしかかった子どもたち⇒社会的自我に目覚めるため、自分がおかれている生活空間が自分に適したものであるかどうかという疑問を抱きやすい



【実態】

- (1) 子どもたちの「学校離れ」⇒成績の思わしくない階層に著しい
(2) 生徒間格差の拡大⇒「やる気のある子」「やる気のない子」

「勉強のできる子」「勉強のできない子」

(3) 「生徒間格差」⇒「親の間の社会階層的な格差」にほぼ対応（親の収入・職業・学歴・地位など）

(4) 近代型学校教育の不自然と改革の指針

(9) 「学校に通うことの意義が感じられない子どもたちの大量発生」という事態への、教育関係者の対応⇒全体としては分裂と混

乱の様相

【原因】 (1) 「教育理念」という狭い枠組に拘束されている

(2) 「学校」という社会組織そのものの歴史的成立と展開に関する認識が不徹底

(10) 近代の学校教育課程の理念 + 実用的な知恵と技術の伝達

|| 抽象的な知識体系の伝授・形式的な均一性・平等の保障

⇒「リベラル・アーツ」的な一般教養を国民すべてに浸透させて、その水準を高める

(11) 学校教育課程の長期化⇒理念と実態との間にずれ



高等学校に通うほどの年齢に達した者が、資質の向き・不向き・能力の適・不適を問われずに、すべて一律に、かなり高度の「一般教養」的な勉強の体系を習得しなければならないとする「どう考えても不自然である（筆者）」

(12) この「不自然」⇒教育行政や親の意識のなかで隠蔽されてきた。

(13) この「不自然」を直視することを回避するための彌縫策

(1) 制度を維持しようと/orする側からの現実的対応

↳ 偏差値などの計量化できる尺度を通じた生徒集団の序列化

(2) 親の本音の表出

↳ 公立公教育ではカヴァーしきれない個々の子どもの学力充実を、通塾・私学の選択という形で満たす。

(3) 学習に不適当な子ども自身の側の本音

(14) 「近代型学校」教育（＝国民のすべてが近代社会にふさわしい知識水準とそこそこの豊かな生活を確保することを目的とする）は、すでにその使命を終えている。

↳ 「不登校の増大・勉強忌避・学力低下・学校に通うことへの疑問」の顕在化



「近代型」の学校の使命がすべて終わったといきることはできない。

【理由】 (1) 新しい世代の子どもたちに、生きていくための基礎学力や規範感覚を植えつける場として、学校の意義は揺らぐ

ことはない。

(2) 近代社会が作り上げたよき文化遺産は、今後も継承・維持されなければならず、このために学校に代わるものがないまだ確立されていない。



(15) だが、現在の学校教育において、思春期以降の高年齢に達した子どものすべてに、一律平等にかなり高度な「一般教養」的学

習内容を学ばせることの無意味と時間の無駄は覆いがたく顕在化している。



筆者の提言

「それからの『学校』は、とくに中等教育・高等教育では、そのスタイルと内容を、各個人の能力と適性に応じた多様なものに変

えていかなければならぬ

3 課題文の論旨

前節の読解を踏まえて、意味段落ごとの内容を整理しながら課題文の基本的な論旨を確認しておこう。

〔1〕今日の学校教育に見られる揺らぎ＝「学校崩壊」「不登校」「学力低下」などの問題は、個々別々に対応しても解決は困難である。

〔2〕こうした「学校教育の失調現象」の原因は日本の社会が近代化を達成して豊かになつたことで、学校を出て富や地位を得るという「学校成功物語」の意義が喪失してしまったことに求められる。

↓豊かな文明生活を自明のものとして生まれ育つてきた子どもたちにとって、苦労して学校に通うことの意義が美感できなくなっている。

〔3〕こうした状況は「学校教育の大衆化」に伴つて一層顕在化しつつある。

〔4〕高等学校に通うほどの年齢に達した者が、画一的に、非実用的・抽象的で、相当高度の一般教養を体系的に習得する、という「近代型教育」の不自然（無意味・時間の無駄）は、すでに覆いがたく顕在化している。

↓それゆえ、これからの中等・高等教育では生徒個々人の能力と適性に応じた多様なものに改めていく必要がある。

この課題文の記述は、重複箇所が多く、また考察部分と事例引用の部分とが複雑に入り組んでいるため、読解しにくい印象があるかもしれないが、基本的な論旨はここに確認したように明確かつシンプルなものであると言える。

筆者の基本的な主張をさらに簡潔にまとめるならば、「現在の学校教育の画一的な教育体系」は「近代化を達成した今の日本の社会に対応していない」ので、子どもたちが違和感を感じ、学校の意味を実感できなくなっている。それゆえ、これからの中等・高等教育においては）、生徒個々人の能力や適性に応じた「多様な教育」へと改革

していく必要がある、というものである。

筆者に言わせると、「校内暴力」「いじめ」「不登校」「学力低下」などといったさまざまな問題を、個別に考察し、ばらばらに対応策を講じるのは誤りであって、根本的な解決にはならない、ということになる。それらの問題の根本的な原因是、明治維新以降続いた「近代型学校教育」の制度そのものが、もはや高度成長を成し遂げた日本社会に対応しなくなってしまった（筆者によると一九七〇年代半ばころがこの分岐点となる）ところに求められるべきだ、ということなのだ。この点を踏まえて学校教育のあり方そのものを基本構造から改めていかなければ、仮に「校内暴力」などの個々の事例は沈静化しても、今度はまた別の問題が生じてくるとう、もぐら叩きにも似た状況が繰り返されることになるだろう、ということである。

4 構想の指針

今までの課題文の理解を踏まえて、ここでは答案作成の指針を確認していこう。

問1

設問の要求は「学校教育が抱えているさまざまな問題について、筆者はその原因が何であると考えているか」を、三〇〇字以内で説明せよ、というものである。これまで見てきた読解・論旨把握を参考にして、以下の点に留意しながら答案をまとめていくとよい。

- ① 課題文全体の要約・説明ではないので、設問の求める事柄に絞ってまとめる。
- ② 自分の言葉や表現ではなく、基本的には課題文の文言や語句に即してまとめる。
- ③ 字数はできるだけ規定字数いっぱいまで記すようにする。

また、答案に盛り込むべき主な項目は以下である。

- (1) 学校教育が抱えている諸問題は、日本社会の近代化の完成とともになう国民的目的の喪失という「共通の原因」によつて生じている現象である。（意味段落1＝形式段落では①～⑤）
- (2) 具体的には、豊かな文明生活を自明として生まれ育つてきた子どもたちが、わざわざ苦労して学校に通うことの意義を身体

と情緒のレベルで実感できなくなってしまった、ということである。（意味段落2＝形式段落では⑥～⑦）

(3) こうした傾向は学校教育の大衆化と共に進行しつつある。（意味段落3＝形式段落では⑧～⑬）

(4) 近代化の完成した現代では、もはや思春期以降の高年齢に達した子どものすべてに一律平等に「一般教養」の学習内容を学ばせることの無意味さと時間の無駄が覆いがたく顕在化してしまったのである。（意味段落4＝形式段落⑭～⑯）

問2

設問の要求は次の二つである。

- ① 学校教育の問題について、筆者がどのような提案をしているのかを説明する。
- ② そのうえで、筆者の提案に対する自分の考えを論じる。

以下で、それぞれの答案作成の基本的な方針を確認してみよう。

① 筆者の提案

筆者の提案の詳細は、課題文の第⑯段落に述べられている。その内容は次の通り。

- (1) 思春期以降の高年齢に達した子どものすべてに、一律平等にかなり高度な「一般教養」の学習内容を学ばせることは無意味で時間の無駄なので、これを改める。
- (2) そして、特に中等教育・高等教育の部分において、そのスタイルと内容を、各個人の能力と適性に応じた多様なものに変えていく。

以上の筆者の提言を端的に表現するならば「画一的な一般教養的教育の押し付けを廃して、生徒の能力と適性を尊重した個性重視教育へと改める」ということになる。ただし、ここで筆者が述べている「多様な教育」とは、生徒を無視した選択科目の枠の拡大や、履修可能コースの増設という類のことではなく、「生徒の個性や独自性を重視した教育」の結果としての「多様性」である点に留意しておきたい。たとえば生徒が百人いるならば、その能力や資質も厳密に言えば百通り存在することになる。それゆえ、

理念的には百通りの教育のスタイルと内容が必要ということになる。筆者の言う「多様性」の考え方は、究極の理想としては、各人ごとの「オーダーメイド教育」の実施ということになるとも言えるだろう。(もちろん、そこまで行うこととは現実問題としてはほぼ不可能であろうが)

② 筆者の提案に対する論述の指針

小論文の構想の基本は「肯定補充」か「批判検討」の二者択一である。それゆえ、基本的には、先の筆者の提案に対して「肯定的に評価しつつ、さらに自分なりに筆者の議論に欠けていると考えられる事柄を補足していく」か、筆者の提案を「批判的に評価しつつ、その問題点を探り」、さらに可能であれば「自分なりの代案」を提示していく、ということになる。

以下では、「肯定補充」「批判検討」のそれぞれの構想案を例示しておくので、参考にしてほしい。小論文の基本構成は「主張 + 根拠 + 具体例」である。それゆえ、今回はこの基本構成に「補充提言」を加えた形で示しておく。

(1) 肯定補充例

【主張】
筆者の提言どおり、学校教育の内容はもつと多様化していく必要がある。

【根拠】

現在の学校での学習は、記憶力など、人間の能力のごく一部に偏った学習内容になってしまっており、多くの子どもたちにとっては苦痛で退屈な作業になってしまっている。

↓学校生活に苦痛しか感じられない状況が改善されない限り、生徒たちの問題行動が完全に解決することはあり得ないからだ。

【具体例】
たとえば、授業に身が入らなければ授業中に私語をする者がでてくるだろう。そして、私語をする生徒が増えると授業が成立せず、学級崩壊に陥ってしまう場合もある。かといって、授業が魅力のないものであるまま、授業中の私語を厳禁すると、今度は登校自体を拒否する者ができる可能性もある。

このように、根本を解決しないで、個別の現象面だけの対応を続けても、次々と新しい問題が発生してしまって状況になっているのである。

【補充提言】
それゆえ、中学・高校と進むにつれて、現在よりももつと生徒の興味や関心に応じた科目選択ができるようにな

していくことが不可欠だ。たとえば、外国のように、演劇や映画製作、作詞・作曲などが正式の科目として導入されてもよいのではないか。現代日本の学校の行き詰まりを打ち破るには、従来の「学校での勉強」の内容 자체を根本から見直す必要がある。

(2) 批判検討例

【主張】

【根拠】

筆者の見解は誤りである。学校教育の多様化は、現在の学校が抱える問題の根本的な解決策にはなり得ない。

筆者は、学校崩壊、不登校、学力低下といった問題の背景には共通の原因があるとして、「学校教育の多様化」が不可欠だと論じている。しかし、現代の教育問題・青少年問題はさまざまな問題が複雑に絡み合って生じているのであって、ただ一つの方法で解決できるほど単純ではないからである。

たとえば、現代社会ではパソコンが普及し、インターネットでさまざまな情報が、家庭のなかでも容易に入手できるようになつた。その結果、ネットによつて犯罪の手法を知り、ネット詐欺やネットを用いた恐喝などを行う少年も出てきている。このような非行行動は、情報化という社会全体の変化に伴つて生じてきたものだ。現代の子どもたちにとって、学校は生活の一部でしかない。子どもは社会全体の影響を受けながら育つ。筆者の考え方は、子どもたちが「社会的存在」だということを踏まえていないのである。

【具体例】

【提言】

もちろん、現在の学校教育が過度に画一的な面を持つてゐるのは確かなので、そうした点も改善していくことは望ましい。しかし、それだけではなく、「子どもは社会のなかで育つ」という点を踏まえるならば、これまで「子どもの教育を学校だけに押し付けてきた社会のあり方」自体を改めていくべきだ。学校や教師だけがいくら努力しても、通学路の商店街にゲームセンターなどが乱立していれば、どうしても授業をサボつてゲームセンターに入りする生徒もでてくるだろう。このように、街づくり一つにしても、子どもたちに大きな影響があるということを認識し、より望ましい生育環境を社会全体で形成していくようにする必要がある。

●
メ
モ
●